

記述式問題の解答実践②

高橋和巳「邪説」について（京都大）

時間
40分

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

* 『千一夜物語』は周知のように、大臣の娘姉妹が宮廷におもむき、夜ごと興味尽きぬ話を王にきかせてゆくという発想からなっている。そして、そのシャハラザードなる姉妹の話は、いわば萌芽増殖とでもいうべき形態をとり、たとえば旅をする一人の商人が道中不思議な三人の老人に会うと、その三人の老人がめいめいに自己の境遇を話し出して独立の物語となり、あるいは一人の登場人物がある状況に出くわして、「これは嘗てあったある大臣と医者のお話そっくりじゃ」と歎息すると、その大臣と医者のお話の不意に膨脹して独立の一篇をなすといった具合である。物語が物語を生み、登場人物が語り出した物語の中の人物がまた一つの物語を語り出す。土地に接触した茎から根がはえ、そこからまた茎を出し、その茎の一部からまた根がはえて独立する、ある種の植物の繁殖にそれは似ている。

察するに、^① こうした発想法の背後には、従来あまり問題にされないアラビア文化圏特有の存在論が秘められているのであり、それは彼らの生命観や歴史意識ともおそくは無縁ではない。仏教に地獄の中に極楽がふくまれている、その極楽の中にまた地獄があるといった思念があつて、それが仏教文学の発想や存在論とかわりがあるのと、多分同じことであろう。

いまここで私は存在論を問題にしようとしていたのではなく、考えてみたいのは「読書について」であるが、『千一夜物語』をふと思ひ出したのは、かつて青春の一時期、私はこの物語の発想に近い読書の仕方をしてきたことのあつたのを想起したからである。

一時、瘦身病弱だったことのある私は、暗い下降思念のはてに死の誘惑にとりつかれ、それから逃れるために手当りしだいに書物を読んだものだったが、それが何か確実な、具体的認識をうるためというよりは、* パスカルの言う「悲惨なる気晴し」に近かつたために、逆に一冊の書物を読んでいる過程での思念の動きは、あたかも『千一夜物語』のように、一つの瘤の上にまた一つ瘤が出来るといった気ままな膨脹をした。

当時友人の一人に一冊の書物を読みきれば、その理解したところを見事に要約してみせねばやまない（要約魔）がいて、電車の中や街頭で彼の的確精密な要約を聞きながら、^② しばしば自分の読書の仕方に対するあの後ろめたさの念におそわれたものである。「あの本を読んだか」と聞かれ、嘘ではなく読んだ記憶があつて、「ああ」と答えるのだが、想念を刺戟された部分や、小説ならば作中人物のある造形に共感を伴うイメージはあるのだが、どうしてもその友人がしてみせるようには、内容を整然と紹介したり説明したりできないのだった。後年、生活の糧をうるべく某新聞の無記名書評を担当したりしていた時、必要上、そうした技術も身につけたが、当時には、どうもその気にはなれず、また周囲にある事柄に関して及びがたい人物がいると、却って逆の性質を増長させてしまう交友心理もはたらいてか、私はますます妄想的読書にのめり込んでいった。やがて病は昂じ、一つの思念や想像が刺戟された時には、その思念や想像のがわに身を委ねて、あえて一つの書物を早急に読み切ること執着しなくなっていた。あげくの果てには、人が死ぬのは、疾病や過労によって肉体的生命が涸渇するからではなく、想像の世界が縮小し消失した時、なにもものに殺されるのであるという私

かな確信すら懐くようになってしまったのである。

(3) これはむろん読書の態度としては、いわば〈邪読〉であって、読書はまず* 即自有としての自己を一たん無にして、他者の精神に接するべきものであり、あるいは確実な、あるいは体系的な知識を身につけるために読むべきものであることは知っている。また客観的精神というものは、そうした過程を経なければ形成されず、また、そうでなければ、認識と実践の統一という美しい神話も成り立たない。

しかしすべて邪なるものには、悪魔的魅力があるものであって、常に正しく健全であり続けることは、おそらくは索漠として淋しいものなのではあるまいか。

私見によれば、ある領域に関して長ずるための唯一の方法は、半ば無自覚にそれに耽溺することであって、中庸というのはあくまで晩年の理想にすぎない。読書に關してもまた同じ。廁の中で何か読みはじめたために廁から出るのを忘れ、飯を食っている間ぐらい、考えごとをするのをやめなさいと両親にさとされても、生返事をしてあい変らず妄想し、なおさっきの続きを読んでいるといった耽溺がなければ、なんらかの認識の受肉はありえないという気がする。そして、それは客観的精神がある時期に芽ばえ育つこととは必ずしも矛盾しない。

あえて〈邪読〉について書きつづけければ、こうした耽溺のあとには必ず〈忘却〉がやってくる。何を讀んだのだったか、題名の記憶はありながらもその内容の痕迹がほとんど残らず、あたかもその時間が無駄であったように印象される。讀んだ内容を可能な限り記憶にとどめておくべき学問的読書や実務型の読書、あるいは次の実践や宣伝の武器としても、章句を記憶にとじこめておくべき行動型の読書から言っても、この〈忘却〉は、はなはだしく迅速である。せつかく讀んで忘れてしまいうらいなら讀まない方がまし、とも言える。だがしかし、その〈忘却〉にも、意味があると私は言いたい気もする。

(4) これは経験的に確かなこととして言えると思うが、もし創造的読書というものがあるとすれば、それは必ずこの忘却を一つの契機とするからである。

かつて* ショーペンハウエルが思考なき多読の弊害を説き、^{*} ニイチェが文献学者から哲学者への転身に、その〈忘却〉の契機を積極的に生かしたことは周知のことに属するが、まこと読書は各自の精神の濾過器を経て、その大部分が少くとも顕在的な意識の上からは、一たん消失するということがなければ、精神に自立というものはなくなるかもしれない。

ものごとはすべて失いかけた時に、そのことの重大さを意識する。いま私が〈邪読〉についてしるすのも、率直に言えば、私自身がすでにその〈邪読〉の条件を大はばに失ってしまったからである。^{*} 職業上の読書、下調べのための走り読み……。もつとも書物と縁が深いようで、少し心を許せば、⁽⁵⁾ 読書の本質から遠くなる危険をもった生活が、おそらく私にかつてあった豊饒な時間を無限に愛惜させるのであろう。

むろん、そうであつても、なお〈邪読〉は〈邪読〉であり、一つの読書のあり方ではあり得ても、他の読書のあり方を排除すべき権利も理由もない。むしろ、人の顔がそれぞれ違うように、無限に多様な読書の態度がありえていいのである。

一冊の書物にほとんど救いを求めるようにして接する求道型の読書、具体的な生活上の知識や知恵を得るための読書、あるいは無目標なしかし存在の奥底からの渴望から発する読書等々。各人がその人の個性にあった読書のかたちを造り出せばいいのであろう。

そして人生がそうであるように、誰しもあれもこれもと欲し、理想はさまざまの読書の型をそれぞれの人生の時期に経過することにあるのだろうが、しかしまた人生そのものがそうであるように、人は一つの読書のあ

り方に比重をかけたまま、その生を終らざるをえないのであろう。
(高橋和巳「邪説」について)による

〔語注〕 *『千一夜物語』=『千夜一夜物語』や『アラビアン・ナイト』の名称でも知られるアラビアの説話集。

*パスカル=フランスの数学者、自然哲学者、神学者(一六二三~一六六二)。遺稿集『パンセ』の中で、悲惨な境遇を考へることから意識をそらすことを「気晴し」と呼んでいる。

*即自有=ドイツの哲学者ヘーゲル(一七七〇~一八三一)の用語。「即自存在」ともいふ、他者との関係によらずに、それ自体として存在するもの。以下の本文にある「客観的精神」、「認識と実践の統一」もヘーゲル哲学を意識したものの。

*ショーペンハウエル=ドイツの哲学者(一七八八~一八六〇)。

*ニイチェ=ドイツ出身の文献学者、哲学者(一八四四~一九〇〇)。

*職業上の=当時、筆者は大学で中国文学を講じつつ、作家として活動していた。

問 1 傍線部(1)はどのような発想法か、説明せよ。
(編集部注…解答欄は140ミリ×10ミリ×二行)

問 2 傍線部(2)について、筆者が「ある後ろめたさ」を感じたのはなぜか、説明せよ。
(編集部注…解答欄は140ミリ×10ミリ×三行)

問 3 傍線部(3)のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。
(編集部注…解答欄は140ミリ×10ミリ×四行)

問 4 傍線部(4)のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。
(編集部注…解答欄は140ミリ×10ミリ×四行)

問 5 傍線部(5)について、筆者にとっての「読書の本質」とはどのようなものか、本文全体を踏まえて説明せよ。
(編集部注…解答欄は140ミリ×10ミリ×四行)

問
5

--	--	--	--

問
4

--	--	--	--

問
3

--	--	--	--

問
2

--	--	--

問
1

--	--